

小千谷縮はどう出来るか

小千谷縮の生産には、小千谷にたくさん降る雪の上で行われる雪晒しを含め、70 を超える様々な工程が伴います。シボがあり、通気性がよく、リネンに似た手ざわりのこの織物は、当地域の比較的温和な気温と高い湿度のため切らずに糸を作り織ることのできる冬に生産されます。

小千谷縮はイラクサの一種である苧麻からできています。苧麻の繊維を手間暇かけて髪の毛のような糸へと加工し、より合わせることで滑らかなより糸ができます。模様は、洗練された絞り染め技法を使って、織り作業の前に糸に染めつけます。その後、織り手は、織機で毎日何時間もかけて慎重に糸を合わせ、布地の模様を織っていきます。最終段階では、布地を手洗いして、小千谷の雪原に広げます。太陽と、溶けていく雪により、布地は自然に漂白され柔らかくなります。

糸を作る

糸を作るのに使われる白く細い靱皮繊維は、苧麻の茎から取ります。乾燥が終わると、糸の作り手は、繊維を細い糸へと爪で裂いていき、それらをより合わせて長い糸にします。このたくさんの労働を要する工程は、苧績みと呼ばれます。気温が比較的温和で湿度が高い小千谷の冬が、糸を切らずに取り扱うのに十分な柔軟性を苧麻糸に与えてくれます。

よりを加える

職人が糸を撚り、糸のつなぎ目をなめらかにしていきます。昔は、糸車などの方法を使って、糸を手作業で撚っていました。しかし、現在では、特別に設計された機械で撚るのが通常です。それから、緯糸として使う糸に、よりきつく撚りを加えます。これが、小千谷縮独特のシボがある生地的關鍵になります。織り作業後、生地をお湯で洗います。これにより、きつく撚って糊づけした緯糸が緩まり、工程の最終段階の間に、布地に繊細な波が生まれます。

染めの工程

柄のある小千谷の織物は、伝統的に、紺と呼ばれる絞り染めの技法を使って作ります。この昔ながらの方法では慎重な計画が求められ、織り作業の前に、経糸と緯糸に綿の糸を手で縛りつけてから染めます。最初に、望む模様を、伝統的な緯糸用の定規を積み重ねたものに写します。各定規は、実際の糸の模様部分に印をつける基準として使われます。これらの印は、染色前に緯糸をきつく結ぶ部分を示しています。結んだ部分は染まらず、白いままです。布を織ると、絞り染めをしたこれらの糸の模様が現れてきます。

小千谷縮には、無地から複雑な花柄や幾何学模様まで、さまざまな色や模様のものが存在します。伝統的には藍が染料として好まれていましたが、最近では多様な色が用いられています。

糸の処理

染色後、海藻の布海苔から作った糊を細い糸に塗布し、織り作業がより容易になるよう、残っているほつれを滑らかにし強化します。この糊は、後ですすいで取り除きます。

織り

小千谷縮は、伝統的に、機の枠組みが半分だけの腰機（いざり機）で織られています。一般的な速さは、1 日に 10～20 センチメートルです。苧麻の弱い糸は、乾燥しすぎると簡単に切れてしまいます。そこで、織る工程では糸を注意深く監視し、手で直さなくてはなりません。柄のある紺の場合、職人は、織機の経糸と緯糸によく注意しなければなりません。糸が 1 本でもずれたり切れたりすると、仕上がる模様に欠陥が出てしまう可能性があるため、織り作業にはとてつもない集中力と器用さが

求められます。現在、小千谷の織物産業は、すべて手作りの縮に加えて、機械でつむいだ糸を機械式織機で織った、シボのある苧麻の布地も生産しています。

仕上げ

生地が織りあがると、湯もみと呼ばれる工程で、生地をお湯に浸けて揉みます。これにより、布海苔の糊が取り除かれて、きつく撚られた緯糸が緩まり、シボのある独特な生地ができます。最後に、雪晒しとよばれる工程で、2月中旬から3月の晴れた日の雪原に、生地が広げられます。生地の表面に当たる暖かい日光が、その下の雪を蒸発させてオゾンを放出し、これが自然に生地を明るく柔らかくします。2月下旬の小千谷の印象的な光景のひとつは、「おぢや風船一揆」の時期に、色鮮やかな気球が頭上に浮かぶ中、この苧麻製の布地が雪上に広げられている光景です。

手作りの苧麻の糸に、手作業の絞り染めで紺模様をつけ、機の枠組みが半分だけの腰機で織るといふ、小千谷縮の伝統的な制作工程は、ユネスコ無形文化遺産と国の重要無形文化財の両方に指定されています。